

中国のほんの話(56)

## 音読で中国語の力をつけよう！

～ 挑戦！朗読中国語 ～

蔭山 達弥

桜が咲く季節になりました。多くの若者が大学の門をくぐり、新たに外国語の学習を始めます。かつてNHKの北京特派員、「ニュース21」のアンカーマンを歴任された園田矢（ただし）さんは、『外国語をどう学んだか』（講談社現代新書1090）の中で、特派員として北京に住んだ時のことについて、次のように述べておられます。

「学校を出てから二十年、特派員として北京に住むことになった。驚くことはいくつもあったが、その最たるものは、北京在住の外国人の中で、日本人の話す中国語がいちばんへたくソだったことだ。それに比べて、欧米人は一般的に、外交官も特派員も、みごとな中国語をしゃべった。かれらの中国語学習の秘訣は、じつに簡単なことだった。音声から中国語に入っていくのである。具体的には、ローマ字化された中国語を学ぶ。そこには漢字は一切介在しない。（中略）わたしに限らず、中国語を学ぶ日本人は、漢字離れができない。ついつい、音声を聞き、漢字をあてはめ、意味を理解するという煩雑な三段階方式に陥ってしまう。欧米人はもともと頭の中に一丁字もないから、音を聞いて、即、意味を解する二段階方式で訓練を積む。これでは勝負にならない。」

この新書本には、園田さんを始め、34人の方々が多様な外国語の上達法を公開されておられますが、園田さんのタイトルは、ずばり「漢字離れのすすめ」、実践的な中国語習得では、逆に、漢字は邪魔だという気もするという見方には私も賛成です。

中国語に限らず、外国語学習は、音読、つまり声に出して覚えないと本当に使える力は身につきません。中国語の授業を担当していて、最近特に目につくのは、教室で声を出さない学生の多さです。中国語を話せるようになりたければ、まず声に出して中国語を発音することです。声に出して覚えることで、リスニングや読解の力を鍛えることができ、話す力も向上させることができます。

アルク発行月刊誌『中国語ジャーナル』に2004年4月号から2009年3月号までの『上野恵司の中国語名文塾』連載分から、30回分を選び、加筆・修正・再構成した『音読で学ぶ中国語名文塾』（アスク出版、2011）は、音読のポイントを参考に、付属のCD（ゆっくりスピードとノーマルスピード）をまね、最初は一文ずつ、次に



全文を何度も音読することによって、読解・リスニング・スピーキングの上達をめざすと同時に、検定試験対策にもなる好著です。

1974年来日され、その年からNHKテレビ中国語講座のレギュラー出演者として、長年担当された陳文正先生の『入門を終えたら 挑戦！朗読中国語』（NHK出版、2005）も、朗読にチャレンジすることで、中国語らしいリズム・アクセント・イントネーションが身につく、表現も覚えられるテキストです。同テキストの冒頭に収録されている「朗読のガイダンス」で陳先生はこう述べておられます。

「もし自分の国の言語を読むのであれば、自分の判断にもとづき、自分で感情を体得し、自分の習慣や自分がよく知っている習慣によって表現することができます。しかし、外国語を読む場合はそれほど簡単ではありません。私たちには十分な感性・知識がなく、もし自分の習慣どおりにすれば、母語の影響を容易に受けます。」

朗読を学ぶには主としてやはり模倣を通さなければなりません。このテキストでは、各課で具体的な例文と結びつけて朗読の方法を紹介しています。中国語を学習している皆さんの中で、普段中国語を音読する時、中国語の朗読に一般的な決まりがあることを意識して読んでいる人は、殆どいないと言っていいでしょう。

このテキストで紹介している中国語の朗読の一般的な決まりとは、例えば「ストレスを置く読み方と置かない読み方、語法ストレスと強調ストレス」、「声調とイントネーション」、「文節または連文節とポーズ」、「ストレスの決まり」などです。具体的な内容は同テキストをご一読下さい。

音読（朗読）は実践であり、実践を通してのみ中国語はマスターできるのです。

かげやま たつや（教授・中国文学）